

年間第 2 主日 (ヨハネ 1:35-42)

イエスは弟子を育て、完成へと導かれる



年間の主日に入りました。灰の水曜日、今年は2月14日になっていますが、この日までしばらく年間の典礼となります。朗読は「最初の弟子たち」についてでした。イエスは弟子を集め、育てています。中田神父も、「弟子」ではありませんが、生まれて初めて「助任司祭」をいただきました。集まってきた弟子を育てるイエスは最高のお手本です。

イエスはまず、弟子をご自分のもとに泊めて、暮らしぶりを見せます。「どこに泊まっておられるのですか」「来なさい。そうすれば分かる」(1・38-39)。生活を共にして、背中を見せることで最初の弟子を教え導きます。中田神父もそうありたいのですが、そもそも平成生まれの助任司祭たちは、「上司の背中を見て学ぶ」という言葉を理解するのでしょうか。

イエスは弟子をご自分のもとに置くだけではありませんでした。弟子を育てる最終段階に、「出かけて行って、見たことを伝える」ここへ導きました。最初にイエスに従った二人のうち一人アンデレは、兄弟ペトロの所に行って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』』という意味——に出会った」(1・41)と伝えるのです。

仮に、平成生まれの助任司祭が、昭和の人間の背中を見て学んだとしましょう。それだけでは足りないのです。イエスは「出かけて行って見たことを伝える」そこまで導きました。これは、弟子を育てる最終段階、弟子を完成へと導く段階です。中田神父がそこまでできたら、少しはイエスの模範に倣うことができると言えます。私の背中を見て学び、助任司祭二人が出かけて行って見たことを伝える日は来るのでしょうか。助任司祭を、完成へと導かなければ(少なくとも完成への途上へ)導かなければ、主任司祭失格であります。

イエスは、ご自分のもとに置いた弟子たちだけを完成へと導いたのではありません。「来なさい。そうすれば分かる」と、今も呼びかけておられます。誰に呼びかけているのでしょうか。私たちに呼びかけておられます。そして「その日は、イエスのもとに泊まった。」(1・39) 私たちはイエスのもとに、約一時間ですが、泊まっています。ミサを通して、イエスはご自分のすべてを明らかにします。

イエスが、私たちに「来なさい。そうすれば分かる」とおっしゃるのであれば、きっとその先も、私たちを導いておられます。それは、私たちが出かけて行って、この場所で見たとを、伝えに行く、知らせに行くことです。

「これはわたしのからだである。」イエスは私たちに、見たもの、味わって体験したものを出かけて行って伝えるように、今日も促しておられるのです。ここで見て、味わうことが最も大切ですが、出かけて行って伝える時、イエスの願いは完成するのです。

年間第 3 主日(神のことばの主日)(マルコ 1:14-20)